

書 ライブで身近に

スルスル動く筆が、昔中に「愛」の字を書き上げた。無地の黄色いTシャツが、世界に一つのオリジナル品

「年賀状に筆字は何通ありましたか」 身近にしようと、「書のライブ」を繰り返している。自分の作品展や飲食店で、客の求めに応じ衣服や色紙に「作品」を仕上げる気安さが、書への関心をあらためて集めつつある。(石原宏治)

飲食店や作品展で Tシャツ、色紙に気安く



客の注文に応じ、布を染めるインクでTシャツに書く若山さん。世界で一つのオリジナル品が誕生する (金田淳撮影)

に生まれ変わった。昨年末、千四千元、飲食店や、忘年会に「きわむ」札幌・ス。毎月三万所ほどが売られ、スキノの中華料理店に、気。衣服に使うのは墨汁。追々求めて筆を動かす若山。ではなく、洗って落さない。染料用インク。年配の人。一方、「書は値段が高。インクがある。名の。を、仕上げにサッと水色。客の要望に応じ、一人。を示してくれ。若君は。と、掛け軸が五万円は。かたは外国人でも、視覚三分ほりて完成する。出来。ジーンズに白いインクで書。るのが常識。若山さん。若山さんの作品をラウン。上がった色紙を手にした男。のが人気だ。 ■

紙三万円」と評された。シで解説展示しているホテ。ルイ・ハミルトン札幌」

格式に風穴「元気出る字を」

いた」と、ほろ酔い加減。でもうが、いつの間にか。ライブ活動を続ける。(札幌中央区)の大野修の顔をほころばせた。 遠い世界になる人が大半。若山さんは自身を「道を。社長は「自由転売で格式は。知人から「書道は、人前。だ。最近ほパソコンのキー。外した存在。自分で道を作。つたところがある。伝統。で字を書きたがらないと。をたたくだけで、好意の書。つていくと評する。だが。世界なのにわが道を行く生。言われ、それなら自分は、。体を簡単に印刷できる。ら「書道家」から「道」を。き方を、道進子らしいエネ。人の輪に入って書こう」と。しかし若山さんは「書は。外し、自分なりのこだわり。ルギキを感じる」と話す。三年前、「まねする人は出。感じる。よくとどろ出す。を持つて「書家」を望ま。プロになって二十二年。食。てきませんね」と自負する。のが年賀状。百枚来て、れ。小学五年の時、学校。招待やたいがきのあて名。料金は出張料の二万円の。直筆の筆字は一枚あるな。る。みで始めた書は通信教。賞状を書く仕事もしてい。ほか、人数に応じて一人二。いか。でも、心がもて育。以来、特定の師につい。今ほ、道内や広島など。九路病の日本酒のほか、さ。まきまな商品のラベルを手。かけ。道内外のラーメン。店やす店で、若山さんの。筆が踊る看板も最近ほ増え。てきた。

目指すのは「書の女人に。ほめられるより、普通人に「元気が出る」ほっとする」と思ってもらえる字」。床の間がないと飾れない掛け軸ではなく、マンションの壁や玄関にタペストリー感覚で自然に掛けてもらいたいと願っている。

淡々

昨年夏、NHKのドキュメンタリーで、沖繩の小島でラジオ局をやっている老夫婦の日帯が放映された。その中で、ディレクターが妻に「どんな時が幸せですか」と質問した。妻は少